

思い出すままに

前川 深雪 (地質学教室)



私が地質学教室図書室に司書として勤めました頃は、教室は理学部2号館北側1~2階にあり、図書室は2号館玄関の真上、2階にありました。現在、教室の保存書庫となっている部分です。昭和9年の建築という建物は文字通り古色蒼然としており、木製タイル張りの床、廊下から見渡せるスペイン風の中庭や、ゆるやかな階段のたたずまいも何処となくゆったりとした、昔の倣を残して、掃除の行き届いた廊下の床の上に、鉢植えの植物の葉影が映っているような、落ち着いた雰囲気を感じていました。

図書室には、昔の暖房設備の名残りはあるものの使用できず、閲覧室と、司書の執務する事務室に、冬はガスストーブがあるだけ、夏は扇風機という時代でした。でも、窓ごとに、緑のけやきの影が涼しく、四季折々に心を楽しませてくれました。

書庫の面積は約150平米、この中に明治10年、教室設立以来の資料が詰め込まれていたわけです。本に換算して、ざっと三万冊もあるかという資料がこの小さな書庫の天井にまで積み上げられ、年々増加する出版物が、置き場なく、少しでも空いている部分に、整理も覚束なく押し込められていました。

しかし、歴史は古く、貴重な蔵書を持つ、日本の地質学の、いわば代表的な、東京大学地質学教室を訪れる世界の学者は多く、その殆んどの方々が図書室に興味を持って見学に来られるのですが、その方たちを案内して来られる先生方が、「ここは書庫というより、倉庫でして…」と苦しい説明をしておられたことを、今なつかしく思い出す

ことができます。

確かに、ひとくちに地質学教室図書室といっても、岩石学、構造地質学、鉱床学、古生物学、堆積学と、学問の範囲はかなり広く、それぞれの資料が、こんなに古くから、こんなに多く集められている図書室は他にないでしょう。それだけに、「スペースとお金を、いっぱいいただけたら、どんなにか立派な専門図書館を作ることができるのになあ。」と幾度思ったかわかりません。

昭和52年に教室は理学部5号館に移転しました。教室の移転とともに図書室も、多量の古い資料を2号館の旧図書室の書庫に残したまま5号館に移りました。当時、移転を手伝ってくれた、カナダから来た院生が、ほこりをかぶった古い図書を書架から下ろしながら、「あー、面白いものがある。楽しい…」等と上手な日本語で、嬉々として開けながら作業していたのを楽しく思い出します。

理学部5号館は、人も知る丹下健三先生の設計になる近代建築で、同じく本部庁舎とともに竜岡門傍にそそり立っています。その7階西側の一隅に地質学図書室は場所を占め、書架を組みました。以来、5号館と2号館の2つの書庫を持ち、多少の不便をかみしめながらも新しい図書室での生活に馴染んでしまいました。瀟洒な近代建築の外観に比して、図書室の中の設備はなかなか充実しないまま15年という歳月が経ち、それでも最近は若干のOA機器なども備えられ、以前より仕事もしやすくなりました。

この20年余の図書室生活の中で、私が楽しく感じられたのは、この図書室での小さな仕事の一つ一つが世界に繋がっているという想いでした。交換出版物の受け入れ、また紀要の発送業務に携わりながら、あるいは直接購入している出版物を回っての手紙のやりとり、そんな業務を通じて私は外国の学会や大学との触れあいを感じました。

今一つ、私を20年間この図書室に引き留めてくれたのは、それまで全く門外漢であった私が、図書室の資料に触れることによって、地球科学を垣間見ることができたことです。地球環境への興味を、以前よりはもっと身近に考えることができるようになったということでしょうか。

退職を前にして図書室の中を眺める時、図書や地質図の一つ一つが、雑誌タイトルの一つ一つがいとおしく思われ、その行く末までもふと考えてしまう自分に苦笑を禁じることができません。

この20年余、私の生活の大部分を占めていた地質学教室図書室のこの職場、2号館書庫内のほこりをかぶったまま、今は殆んど開かれることなくひっそりと収納されている1800年代からの資料たち、また、毎日のように世界各国から送られて来る出版物の数々に心の中で別れを告げながら、感無量の思いで立ち尽くす昨今です。

お世話になりました教室の皆様方、各図書室をはじめ、理学部の皆様方、私の不束な20年余をお支え下さり、ありがとうございました。ご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

